

また谷口先生は語をついで言われた。「すべての持ち物を神様に献げたら、罪が消えるというのは本当である。しかし、すべてを献げることができなかったら少しずつ小出しに金を神様に出したら、出した額だけ罪という借金が消えるというのは少し変である。すべての持ち物を神様に献げるといふことは、持ち物を神社やお寺や本山に持つて行くことではない。自分の持ち物は一つも無いと悟ることである。みんな神様のものであると悟ることである。みんな神様のものであると悟れば、もう本山へ持つて行くこともいらない。本山にあつてもここにあつても自分の持ち物は一つもないとわかる。皆神様のものであるとわかると、ここにあつても神様のものである。そうすると、形の上では自分が持つていても神様に献げたことになる。この自分というものも神様のものである。そうなる形の上では自分が持つていても、もう取り扱い方が変わってしまう。自分のものとして扱わないで神様のものだとして扱う。自分のものだと思うと、出したら減るように思つたりして持ち物に引っかかるが、神様のものだと思うと、もう引っかからない。出すべき所へは出す。出して減るかという、すべてのものは神様という大海の中にあるから、柄杓

で大海の一方の水を掬いとして他の方へザーと明けても掬つてとった後へはまた大海の水が元のとおりにもどつて来ているように、われわれはすべてのものが神様のものだとわかると自由自在に出しながら、ちつとも自分の手許の供給は減らないようになる。」

わが身は無い

その天理教の先生は語をついで言つた。「私が天理教の教師になりましたのは、最初は弟の命を助けたいためであつたのです。弟がある日、遺書を書いて家出しました。私はどんなにでもして弟の命を助けたいと思い、天理教の神様に『私たち夫婦の身体と持ち物のいっさいとを神様に献げて御用に使つていただきますから、どうぞ弟の命をお救ください』と祈りました。すると二日ほどすると家出をした弟から一枚の葉書が来ました。その葉書には『自分は死のうと思つて馬入川へ飛び込んだがどうしても沈まない。しかたがないから今度は萱原に火をつけて日本武尊のようにその火の真ん中に坐つていたが、どうしても自分の身体に火が燃え移らないので自殺に失敗した。しかし今度こそはまちがいのない死にようをする』と書いて終わっていました。それで私はまた一心に祈りました。するとまた、四、五日すると弟が警察の方から送られて帰つて来たのです。訊いてみると、今度こそ失敗のない死にようをするというのは兵児帯で首を縊つて松の木にぶらさがることだったので。しかしそれでも死ねなかった。突然その木の枝が折れて弟は高い所から地上にしたたか転落したので。その時、弟は初めてハツと気がついたのです。

自分がいくら死のう死のうと思っても死なせない不思議な力が働いている、自分を生かしている力は自分の力でないと気がついたのです。それで今までのことを有体ありていに打ち明けて、どうにでもこの身体をしてくださいと警察へ身を抛り出したのでした。そういうわけで弟は命拾いをして帰って来ましたが、神様に弟の命を救けてもらったのでございますから、私は約束どおり、自分たち夫婦の身体と小さいの持ち物を神様に献げて御用に立てていただかなければなりません。それでさっそく私は大阪の某教会長のところへ私の持ち物——家財道具いっさいを持って行って、『どうぞこれ売って神様の御用にお立てください』とその全部を差し出したのでした。

持ち物は全部献げましたが、私にはその時三千円の借金がありました。現実界で職業を持って働いていましたならば、その借金を返すだけの金の儲かる時も来るでしょうが、天理教の布教師になってしまえば金の儲かる時がないからその三千円の借金を返す時がない。しかし借金があるのを金がないからと踏み倒すのは本当でない気がする。これはどうしたらよいだろうということで丹波市の天理教の本部へ往って事情を打ち明けて相談しました。すると本部の先生がいうには『そんな三千円なんて返さないでもよい!』と云うのです。『それでも借りたものを返さないでは借金済ましができていないよ、うで心苦しくてしかたがない』と私が申しますと、『あんたの借金はそんな三千円くらいではない、ほかにもっとたくさん借金がある』と申すのです。『私はそんなたくさん借金をした覚えはありません。』『たくさんもたくさん、あんたは無限の借金をもっている。それを返さねばならぬから、三千円

くらいの借金のことは言うておられん』というのです。『そんなにたくさん借金をした覚えはありません。』『借金というのは、あんたの過去からの因縁じゃ。その無限の借金を払う道を考えないと三千円くらいの借金のことは言うていられん。』『その無限の借金を払う道はどうしたらよいのですか。』

『それはあなたが発心はつしんしたとおり、わが身忘れてみんな神様の御用に献げてしようたらよい。わが身忘れて神様にみんな献げてしようたら、もう自分の身でないから借金は神様が払うて下さり、すべての借金は消えてしまふ。』こう言われてみますとそれも道理のような気がいたしますが、私はこんな堅苦しい性質のものですから、実際に何とかその三千円を処置しなければ承知ができません。『それでは実際問題としてその借金をどうしたらよいのですか』と言いますと、本部の先生は『あなたがそんなに気にかかるのなら、その借金の貸主のところへ往って、実はこういうわけでわが身を神様に献げる決心したんだから、その借金は勘弁してください、とすべてを打ちあけてあやまりなさい』と云うのです。それで私は東京にいる債権者の所へ出かけて行きました。借金は二千円と千円と二口ありました。まず二千円の貸主の所へ参りまして、実はこういうわけだと話しますと、叱られるかと思いのほかその貸主が『よう君はそういう殊勝な決心になったね』と感心してくれまして、『そういうわけなら君の借金今棒引いてやる』と眼の前で借用証文に棒を引いてくれました。その次には千円の貸主の所へ参りましたが、この貸主は、前々からきいていますところでは一銭の貸金でも残っていたら取り立てずにはおかないというような因業いんごうな人だということ

ですから、事情を話してきて何を言われるかと身体を縮めてうつむいてかしまっていますと、その貸主は、『君あのひとにも二千円の借金があったねえ。あれはどうした?』と言うのです。「あれはここへ来る前に立ち寄りまして事情をお話しますと、眼の前で借用証文に棒を引いてくださいました」と申しますと、『そうか棒をひいてくれたか! あのひとつが棒を引いたのならわしも棒を引いてやる。わしも長年の間にいろいろと貸金も倒されたが、今度のように気持よう倒されたことはない。あんまり気持のよい倒されようだから、一つ祝いに、君にごちそうをよんでやる』と言われまして、借金を棒引いてもらいました上に、牛肉のスキ焼までよばれました。因業な金貸しだと思っていたこの人までこんな気になって借金を棒引きしてくださる。わが身忘れて神様にみんな献げたら無限の借金が消えてしまうのは本当であると、ありがたうその時お蔭をいただいたわけでありました。」「それはなかなかよいお蔭をおいただきでした」と谷口先生はおっしゃった。「わが身忘れて神様にみんな献げるといふことは、我が身はないという実相を知ることです。天地間^{てんちかん}に神様のほかに何もありません。天地間が、みんな神様のものではあると知ることです。天地間が、みんな神様のものではあれば、そこに自分の造った業というものの無いことがわかる。自分の造った因縁のないことがわかる。これがわかると、その人は本来業の無い世界、因縁の無い世界へ出たのです。天理教でいえば因縁が切れたことになるのです。生命の実相の中へ跳入^{ちようにゅう}すれば、もう因縁は無いのです。」それはきわめて明快な調子であった。

靈術では真に病氣は治らない

服部仁郎氏のお子さんを小学校で受け持っている栗原訓導は以前に一色春峰という人から離魂療法^{りこんりょうほう}というのを伝授されて他人の病氣を治してみるとかなり多くの人々の病氣が治ったが、自分の家に病人が絶えず、不幸の絶え間がないのを妙に思っていたのであったが、その後一色春峰氏が死ぬ、良人の跡をついで病氣治療をしていた一色夫人が死ぬ。これはいよいよ変なことであると思っていたときに、栗原訓導は「生長の家」に紹介されたのであった。

「どうしてこんなに一色さんや、われわれに不幸が起こるのでありましょうか」と栗原訓導は谷口先生にお尋ねした。

「靈術で病氣を治すといふことは因果^{いんが}を撥無^{はつむ}することになるから善くないのだ。病人は病氣になるべき因がある。その因を滅尽^{めつじん}する悟りに導かないでいてただ横合いから靈術という暴力によって治すといふことになる、因果の大法^{たいほう}を破ることになるから、せっかくその病氣を機縁として悟りに導かれようとしている人に妨げをすることになる。だからその人は因果の大法を破った報いを自身に受けなければならぬのだ。生長の家では病氣を靈術で治すなどといふことはしない。心を悟りに導いて、心の悟りの投影として病氣が自然に治るのだ」と谷口先生はおっしゃった。

栗原訓導はその後家族中健康になり、病氣の生徒などはただ一回その生徒に生長の家の真理の話をするだけで治るようになった。